

ア！安全・快適街づくりニュース

Ah ! Safety and Amenity Machizukuri News

——平成20年度総会開催 6月18日——

冒頭で内閣府池内参事官が講演

「ア！安全・快適街づくり」は、6月18日14時から大成化工株式会社厚生棟で、平成20年度の総会・評議員会・理事会を開催しました。

本年は当NPO設立5周年に当たり、地元の皆さんも大勢参加されました。

開会に先立ち内閣府の地震防災の元締めである池内幸司参事官が、中央防災会議「大規模水害対策に関する専門調査会」の設立趣旨と9回までの検討結果について講演されました。

次いで評議員会の審議に入り、議事に先立ち石川理事長が、この5年を振り返り、お世話になった多くの方に謝意を表するとともに、設立の趣旨と活動の成果をパワーポイントを使って紹介しました。

さらに事務局の渡邊喜代美さんが、当NPOの活動内容とそれを推進する活動体制について紹介しました。その中で特筆すべきこととして、当NPOが「全国都市再生モデル調査」に応募し、内閣官房都市再生本部の助成を得て、「街づくり担い手育成を含め多様な主体が参画する安全・快適な街づくりの推進方策検討調査」を19年度事業の中心として実施したことを挙げ、その概要を報告しました。

さらに、過去2年にわたり河川環境管理財団から助成を受けて実施した新小岩北地区におけるワークショップの歩みの紹介と、それを受けて平成20年5月10日に行なわれたシンポジウムで採択された「皆が洪水対策に取り組むための『新小岩宣言』」の紹介がありました。

その後、議案の審議に入り、19年度事業報告（案）・決算（案）、監査報告、20年度事業計画（案）・予算（案）、役員選任、併せて特別会計として計上した「19年度から20年度に渉る全国都市再生モデル調査の予算総括表」について説明があり、原案通り承認されました。

総会終了後、恒例の懇談会が開催されましたが、今回は石川理事長の叙勲祝賀会を兼ねた会となりました。松田理事の祝辞、花束贈呈、理事長の謝辞、徳倉副理事長の発声による乾杯、その他出席者からのお祝いの言葉があって、和やかな雰囲気の中に会は進行し、中川前北新小岩連合町会長の締めで幕を閉じました。



総会参加者



両手に花束の石川理事長

中央防災会議 「大規模水害対策に関する専門調査会」 の検討結果について

内閣府参事官（地震・火山対策担当）池内幸司氏の講演要旨

池内参事官は、始めに利根川、荒川で氾濫が生じた時の関東地区での被害想定結果について紹介されました。それを踏まえたうえで、今後の取り組みとして、避難率の向上、孤立者の救助体制の整備、水・食糧等の供給体制の整備、排水機能の確保、地域ごとの被害状況に応じた避難体制の整備、洪水量が増加し、浸水深が大きくなった場合も考慮した避難体制の整備の必要性などを指摘されました。以下にその要旨をご紹介します。

1. 多発する大規模水害

平成17年8月のハリケーン・カトリーナによる高潮災害をはじめとし、近年、世界的に大規模水害が多発している。わが国においても、豪雨の発生頻度が増加傾向にある。

国内で1時間雨量50mm以上の集中豪雨の発生回数は、昭和50～60年代と比べ、最近10年間で約5割程度増えている。また、地球温暖化により、100年後には、地球の平均気温が1.8～4℃も上昇するといわれている。

このため「気候変動に関する政府間パネル」は、北極や南極の氷が溶け出し、最大約60cmの海面上昇等を予測している。

約60cm海面が上昇した場合、東京湾周辺のゼロメートル地帯の人口は、現状の176万人が海面上昇後は270万人、約1.5倍に、面積は現状の116km²が海面上昇後は244km²となり、約2.1倍になる。

日本の気候が温暖化すると、大型台風にもそのままの勢いで直撃され、激しい雨が降りやすくなる。

2. 氾濫時の関東地区の被害想定

◇大規模水害による長時間の浸水

これまで大規模水害が発生すると、長期間に渉り浸水している場合がある。昭和22年のカスリーン台風により、江戸川区、葛飾区では20日間の浸水、昭和34年の伊勢湾台風により、名古屋市内は約30日の浸水、愛知県海部郡南部では120日以上にわたり浸水している。



平成17年ハリケーン・カトリーナにより、ニューオリンズ市内は43日間浸水した。

利根川の治水施設の整備は着実に進められているが、昭和22年カスリーン台風災害時と同規模の洪水には依然対応出来ていない。

利根川の堤防が埼玉県大利根町で決壊した場合には、浸水面積約530km²、被災人口約230万人に及ぶ。

荒川も、昭和22年カスリーン台風災害時と同規模の洪水には依然対応出来ていない。

200年に1回の確率で発生する洪水により荒川の堤防が東京都北区で決壊した場合は、浸水面積約110km²、被災人口約120万人となり、丸の内、新橋等都心部も浸水する場合もある。

利根川や荒川の決壊がこのような大きな被害をもたらすのは、カスリーン台風が来襲した昭和22年より流域人口が大幅に増えたこと、地下水を工業用水として汲み上げ地盤沈下が進んだことが要因である。

江戸時代以前は、利根川は、中川・綾瀬川流域を流れて東京湾に注いでいた。流域は湿地帯となっていたが、流域一帯を利用出来る土地とするため、江戸時代に銚子の方に付け替えられた。

しかし、川は昔の地形を覚えている。利根川がひとたび決壊すると、同じようなことがより大きな水害として起こる可能性がある。

◇排水ポンプ場等排水施設による排水

川の水が堤防を越え、あるいは堤防が壊されて低地の市街地に浸水するとポンプ場及びポンプ車等により排水しなければならない。

ハリケーン・カトリーナ災害時には、8割以上のポンプ場が停止した。

停止の原因は、操作員の避難（47%）、ポンプ場の浸水（26%）、停電（8%）、断水による冷却水不足（4%）等であり、全排水能力の15%しか稼動しなかった。

排水機能の確保は、浸水継続時間、死者数、孤立者数に直結している。カスリーン台風時と同規模の洪水が発生し、排水施設が稼動しない場合、救助活動が難航すると1ヶ月以上孤立する可能性がある。救助活動が順調でも2週間程度は孤立すると予想される。

排水施設が稼動する場合でも、救助活動が難航すると1週間は孤立し、救助活動が順調であれば3日程度と予想されている。

一度水害が発生すると、浸水した地域は全て被害を受ける。船外機付きのボートが使えず、手漕ぎボートを使うしかなく救助活動が難航する可能性がある。

◇怖い断水・停電

浄水場等の浸水等により、飲料水や生活水の確保が問題となる。

停電の影響で、深刻なのは病院である。今の病院は、非常電源が地下にある場合が多く、心肺機能の維持装置、点滴等医療機器の機能が停止すれば、深刻な被害が発生する可能性がある。

3. 大規模水害発生時の応急対策

大規模地震や火山噴火については、専門調査会等において災害発生時の応急対策等を既に検討している。しかし、大規模水害発生時の応急対策等についての検討は不十分である。このため、中央防災会議に「大規模水害対策に関する専門調査会」を設置した。

◇専門調査会の検討対象

利根川、荒川の洪水氾濫及び東京湾の高潮氾濫

◇専門調査会における検討内容

○大規模水害発生時の被害像の想定

○大規模水害対策の検討

〔主な検討項目〕（例）

- ・決壊情報、氾濫情報の把握と伝達
- ・大規模広域避難対策
- ・身体障害者、入院患者等災害時要援護者の避難支援対策
- ・多数の発生が予想される孤立者対策
- ・病院の機能維持対策
- ・氾濫流の制御、氾濫水の排水対策

4. 地震水害対策

国や都は、ゼロメートル地帯等において、地震が発生しても浸水が生じないように堤防を強化するため耐震対策事業を実施しているが、整備途上である。

大規模な地震が発生し、堤防が壊れて、復旧する前に台風や高潮が来ると大水害が発生恐れがあるため、今後充分に対策を検討する必要がある。



池内幸司氏の略歴

昭和57年、東京大学大学院工学系研究科修士課程を修了し、建設省に入省。その後、河川局河川計画課課長補佐、リバーフロント整備センター研究第二部次長、河川局開発課建設専門官、同河川環境課建設専門官、国土交通省河川局治水課河川整備調整官、同河川計画課河川事業調整官等を歴任。平成18年7月、内閣府参事官（地震・火山対策担当）に就任。首都直下や東海、東南海等の大規模地震対策、火山対策、大規模水害対策、防災情報等を担当。



シンポジウム「大規模水害に地域で備える」

～広域ゼロメートル市街地における地域住民の取り組み～

20.05.10. 新小岩地区センターで開催

主催 NPO法人ア！安全・快適街づくり 広域ゼロメートル市街地研究会
葛飾区新小岩北地区連合町会

後援 葛飾区 江戸川区 荒川下流河川事務所 NPO日本都市計画家協会

協力 東京大学都市情報・安全システム研究室

葛飾区、江戸川区では水面よりも低い地盤に高密、広域の市街地(広域ゼロメートル市街地)が形成されています。当然のことながら、大規模水害が発生した場合、大きな被害となることが予想されます。新小岩地区においては、こうした万一の状況に備えて、「自助・共助でどう備えるか」をテーマに連合会の皆さんと一緒に議論が進められてきました。

平成18年度から研究活動や合計5回のワークショップ(少人数で議論する場)、ボート乗下船や川から街を見る、といったイベントが積み重ねられ、「広域ゼロメートル市街地」の住民として、地域として取り組むべき対策について検討されてきました。

今回のシンポジウムは、これまでの取り組みを広く知って頂くため開催されました。当日は、雨にも拘わらず100名以上の方々が参加されました。以下参加された方々の発言内容をご紹介しますが、限られた紙面に分かりやすく掲載するためかなり要約させて頂きました。また、発言者の人柄等が伝わるよう話し言葉のまま記事を作成しました。

なお、当日は大変活発な議論が行なわれ、これから共に大水害に備えた街づくりに取り組んで行こうという気運が高まりました。この参加者の意欲を広く共有するため、「新小岩宣言」という形で締めくくり、シンポジウムを終えました。(文責：事務局広報担当 伊藤泰二郎)

「新 小 岩 宣 言」

わたしたちは、大規模水害への地域の備えを行なうことによって、ゼロメートル市街地において、安心して生活できる環境を実現するとともに、地域のコミュニティが元気づけられることを願い、ここに次のような宣言を行ないます。

- 一、ゼロメートル市街地における大規模水害への備えを地域から始めます。
- 一、お年寄りから子どもまで多世代の交流を進め、コミュニティの元気を再生します。
- 一、行政を越えた地域同士の協力を進めます。
- 一、住民、地域の小中学校、PTA、NPO、企業、行政は、お互いに協力し、大規模水害に備える行動計画の具体化に向けた活動を行います。



「1人では何も出来ない。だが1人が始めなければ何も始まらない」

NPO法人 ア!安全・快適街づくり 理事長 石川金治

ゼロメートル地帯というのは、輪中堤で囲まれて住めるようになっている。堤防が無かったら、皆さんが住んでいる所は、魚が棲む所です。

だから1箇所でも切れたら、2階とか3階にいないと生活出来ない所に住んでいるのです。そして1回水が入ってしまうと、復旧してくれるまで20日位待っていなければならない。

世界の歴史を見て、一度の台風とかサイクロンで30万人以上亡くなった事例というのは、9つあるんです。そのうち6つはゼロメートル地帯で起きています。そういう事から見てもゼロメートル地帯というのは災害を受けると被害が非常に大きい訳です。

ですから河川管理者は丈夫な堤防を作っています。普通の地震では壊れないように出来ているんです。

ところが最近の新潟・中越地震を見ても分かりますように、柏崎の原子力発電所では、応力・外力の3倍とか5倍もの力が働くケースもあるんです。

それは断層の上にある場合なんです。原子力発電所は点ですから、断層を避けて作れば、逃れることが出来るので、その研究を一生懸命やっています。

しかし、堤防だとか高速道路は線ですから、どこかで断層の上には出来る所がある訳です。

一方、何処が断層かというのはなかなか決められない。だからそのような所では切れるかも知れないという事を頭の中に入れておいて、切れたらどう対応するか、そういう事を考えている人と考えていない人とは、初期対応が全く違います。

命が助かる人と助からない人の区別は日常のそういう努力をしたかしないかで決まります。

そういう事は、疑う余地はないのだけれども、なかなか親身になって考えてくれる人はいない。

だから、皆さんが自分で考えなければいけない訳です。今日はその時間にしてもらいたいと思います。

元々この辺りは田圃が一杯あったんですが、地盤が下がり塩水が入ってきて稲作が出来なくなりました。丁度その頃、宅地として土地を利用する事が出来るようになり、稲作が出来なくても、盛土して下水が整備されれば、お百姓でやる以上に収入があるものだから誰も文句は言わなかったんです。



むしろ、下水道道の整備を早くやってという意見が強かった。だから下水道の整備を懸命にやり今は100%です。次はそろそろ自分の命を大切にしようという声をあげてもいい頃かなと思っているんです。

この話をすると、そんな事を言っても、どうせ誰も取り上げてくれないよ、とおっしゃるんです。

配布資料のプロフィールの中に書きましたが、「1人では何も出来ない。だけどその人が始めなければ何も始まらない」これがわがNPOの原点です。

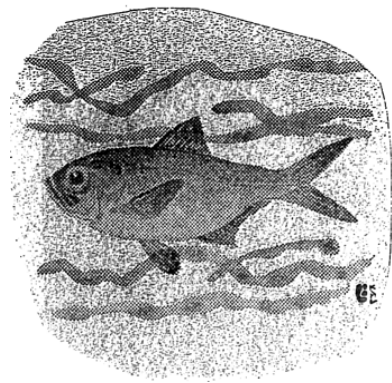
一つの事例を申し上げますと、過去の水害でここまで水が来たというのが分かるように水位表示板を出して貰ったんです。私が現役の頃やろうよといったら、地域のイメージが悪くなり、地価が下がるからやめてという事で出来なかった。

今度NPOが、親身になって町会とお話をしたら、じゃー試しにやってみるかという事になり、8本だけ立てるのを認めて頂きました。それで8本だけ立てたら、隣の町会からうちの所もやって貰おうかという意見が出てきた。最終的には、葛飾区が取り上げてくれて、今200本近く出来ています。

こういう風に、言い出しっぺがいれば段々と実って来るのだと思います。このシンポジウムは、皆さんがいろんな意味の言い出しっぺになって頂く事を願って開いたのです。

体験から学ぶという言葉がありますが、水害を体験するのは難しいことですから擬似体験をしていくのです。

そのためにワークショップがあるのですが、これは若い人の方が想像力が強いので、どう対応しようかという事を想像しながらやっていくのは得意なのです。これからは、子供達に積極的に働きかける必要があります。



この2年間で取組んできたこと

加藤孝明(東京大学大学院工学系研究科助教)



〔ゼロメートル地帯の育ち〕

実は、私も名古屋近郊の完全なゼロメートル地帯の育ちです。子供の頃に町役場に行くと、去年の海面といって電柱に水位表示板が張ってあったんです。

今年の海面というともっと背の届かないような場所についていたのを記憶しております。

僕の水害の経験は、今振り返ると楽しかったんです。確かに水害があったんですが、私の家は自然堤防の上でしたので、水に浸かっていないんです。

周りの浸かっている所にわざわざ入りに行くんです。一回りして楽しかったーで帰ってきた。つまりきちんと備えていれば、実は楽しいかもしれない。私のプロフィールの所に書いてありますけれども、「大洪水を数百年に一度のお祭りにしたい」と。

多分、お祭り感覚で迎えられる事が一番いい状態かなという気がしています。

〔水害の研究〕

東京に出てきて、大学に入りまして、ずっと地震防災の方を研究していました。

水害については関心が低くて、国土交通省の河川局に任せておけば大丈夫だろうと思っていた訳です。

水害の研究は、石川理事長に誘われて始めたのです。ここ4年ばかり、広域ゼロメートル市街地と呼ばれる下町地域の研究に携わらせて頂いております。

実際にふたを開けてみると、地震防災に比べると如何に市街地側が水害防災に備えていなかったか、という事を非常に強く感じたのが最初の印象でした。

水害の経験は無いに等しく、関心も無かったので、一回関心を持つとやるべき事が沢山あって、段々楽しくなってきたというのが今の私の状況です。

「広域ゼロメートル市街地」という言葉はまだ一般的ではありませんが、水面下のゼロメートル地帯で、それに加えて高密度で、広域な市街地がそこに形成されている。こういった市街地の事を、広域ゼロメートル市街地と呼んでいます。こういう市街地は、世界を見ても実はそんなに沢山は無い、日本で言うと、濃尾平野、名古屋、大阪、東京です。

ハリケーンカトリーナにより大水害が起こったアメリカのニューオーリンズは、ゼロメートル地帯ではありますが、人口密度はこの地域の10分の1から20分の1位に過ぎないので高密度ではありません。

こういった市街地を対象に地域の安全性をどう高めていくべきかという研究と、皆さんと一緒にやってきた取組みが、この数年間の活動内容です。

広域ゼロメートル市街地という言葉が今後日本全国に、また世界的に広がり、問題意識が共有されればいいなと思っています。

〔ワークショップの取組み〕

新小岩北地区でこの2年間ワークショップ(WS)といわれる少人数での討議方式を使い、議論して対策を検討したり、又外に出ていろんな体験をしながら水害の危険性と対策を皆で一緒に考えてきました。

ワークショップをやろうと思ったときに、最低限これだけはやりたいなという事が二つありました。

一つは、ワークショップを機会にして次の行動につなげたいということ。地震災害と違って、水害はわりとメカニズムが簡単なんです。水は高い所から低い所に流れるだけですので、複雑な動きもそれ程しない筈なんです。

だから、低い所に住んでいる方は当然危ないという事は分かっている。抽象的な理解から、一歩先に進めるためにはどうしたら良いのかという事を考えていました。

それはどういう事かということ、自分の住んでいる町で災害が起きた時に、具体的にどういう状況になるのかという事を頭の中でイメージ出来る様になれば、何かしなければいけないという次の行動に結びつくと思いました。これは、ワークショップの成果を評価するポイントになるのではないかと思います。

もう一つは、持続的に取組んでいきたいという事です。大地震が起きるとばっと気分が盛り上がり、非常用持ち出し袋を買うんですが、いつの間にか何処にあるか分からなくなったりします。

気分は一瞬だけ上がるけれども、それが長続きしないのは、防災意識がないからかなと思っています。

今回は、そうならないように続けていくためにはどうしたらいいのかを最初に意識していました。

他の災害と違って、この地域の特有さ等すごく難しい事があると思うんです。広域ゼロメートル市街地では、こういった対策を立てればいいのかと考えた時に、うまく答えられない。こういった問題にぶち当たった時の対応というのは、そんな事は考えないようにしたり、見なかった事にすれば日々幸せに暮らせる訳です。人間の本質はそうだと思うんです。

あまりにも厳しい状況を突きつけられると、そこから逃げてしまう、そうなりがちだと思うんです。

危ない、危ないというともう諦めるしかないかもしれない。そうならずに、前向きな姿勢で、前向きな発想で、少しでもいいから前に進んでいこう。そして、長期的には絶対安全に水害を楽しめるような町にするんだというような気持ちを持っていただく事がとても大切なと思います。

[シンポジウムの位置付け]

今回のシンポジウムの位置付けは、三つあります。

一つ目は、この二年間の新小岩地区での活動を総括することです。

二つ目は、これまでの取組みは、町会の方々が中心ですが、町会のまだ参加していない方へ活動内容を報告することです。

三つ目は、葛飾・江戸川・足立区は、全域が広域ゼロメートル市街地で、運命共同体なんです。

この地域の方々と問題意識を共有したいという事です。今日、参加された皆さんが、シンポジウム終了後、今後何かをしていかなければいけないという気持ちになって頂けるとこのシンポジウムは成功かなと考えています。



参加者が続々と会場受付に

これからの課題を考える

加藤孝明（東京大学大学院工学系研究科助教）

[水害にも地震に耐えられる地域を作る]

ワークショップの中で、町会の皆さんに防災資源を探しに出かけたわけですが、地震用の防災備蓄倉庫が、実は町の中に沢山あるんです。

ところが、水害の浸水の深さと重ね合わせてみると、7～8割方水に浸かっているという状態でした。

綺麗な水に浸かっていたら、アルファ米もおいしく食べられるかと思いますが、汚い水ですから食べられなくなってしまいます。だから水害の事を市街地側があまり考えていなかった。これは町会の取組みもそうだし、行政の取組みもそうだと思うんです。

そういう意味で、今日をきっかけにしてもよいですが、水害にも地震にも耐えられる地域を作っていくというのが非常に大きな課題だと思います。

皆さんもそういう意識を持っておられると思うので、区にしろ、東京都・国にしろ、今後そうなっていくと思います。

[生き残っていくための能力を高める]

先程来、カスリーン台風の経験談も出ていますけれども、当時と比べると人間が非常に弱くなっていると思うんです。

先程、お父さんが柱で筏を組んだという話をしていたけれども、今そういう事が起こると、僕が作った筏に子供を乗せられるかという、心配で乗せられないです。そういう技術も無くなっているし、そもそも筏を作るような材料が町の中から消えちゃっているんです。

ワークショップの中でも水害体験のノウハウというのが皆さんから聞いて面白いなと思ったんですが、雨戸を筏代わりにする。1枚だと沈むけれども2枚だと沈まないという。今、雨戸は、アルミサッシュで全然話にならない。

そういう意味で、昔の状況と今の状況は町も違うし、町の中にあるものも違うし、もっと違うのは人間が違うと思うのです。

僕も、5年位前は大学のどんな汚い所でも寝られましたけれども、最近は寝られなくなりました。

そういうところをどう変えていくか、人間をどう強くして行くか、個人のサバイバルの能力、生き残っていくための能力を高めていくかという事は、地域や、学校の教育でかなりの長い時間をかけて取組んでいかないと行けないのかと思います。

【子供に水害体験を伝える】

今回のワークショップでは、水害のシミュレーションを行って、自分の家の1階が駄目になる、2階が駄目になるという事が分かる技術を使っています。

このシミュレーションを開発する前に、地震火災で、ここから出火するとこういう風に燃え広がってしまうというのを、いろんな方に見て貰っています。

かれこれ7、8年位やっていますが、この中で一番食いつきがいいのが子供です。子供だと面白がって、次はこういう条件設定してとか、僕の家から燃やしてくださいといって、いろんな事をやってどんどん盛り上がって行くのです。

子供は遊びながら、ある種ゲーム感覚なのかもしれませんが、どんどん前に進んでいけるんです。

そういう意味で、子供の地域における力というのは、実はものすごく強いのだなと感じています。

さらに、この地域は60数年前に大きな水害があって、それを経験したお年寄りがいる訳です。このお年寄りの体験を子供にきちんと伝えていくという地域の仕組みが重要なのかなと思います。

ただその時に、注意しなければいけないのは、綺麗な水を濾して飲んでいるという指摘がありましたけれども、当時の状況と今の状況の違いを踏まえてきちんと翻訳しないといけない。

大工仕事をあまりしたことがない今のお父さんに筏を作れといっても、作れないという話になってしまう。経験を翻訳して、それを子供に伝えるといいと思います。

【短期と長期のバランスのとれた水害対策を作る】

今回のワークショップの皆さんの議論の中で、明日来るかもしれない水害に備える、非常に短期的にするものから、学生さんの100年後の市街地像を構想するという非常に長期的なものがありました。

このバランスが難しいけれどもきちんとすべてを捕らえていかないといけないかなと。短期的なことはすぐ出来るかもしれないけれど、限界がある。

長期的なものはすぐ出来ないかもしれないけれど、きちんとした安全性が確保出来るかもしれない。

これはどちらかだけだと片手落ちだと思います。

この二つを上手に組み合わせながら、一步一步前に進んでいく。そのためにどうすれば良いかということこれから一緒に考えていかなければいけないと思っています。

【安全で楽しい魅力的な街づくりをする】

長期的にこういう市街地が良いだろうと考えた時、水害に対して安全な町が出来ればいいとすると、つまらない町になってしまうかもしれない。

それだと苦勞する甲斐もないし、お金をつぎ込む甲斐もないような気がする。むしろ、危なくとも楽しい町の方が良いよ、と僕なんかは思うのです。

そういう意味で、単に安全になればいいということではなくて、安全になって楽しい、素晴らしい、魅力的な町をどう考えていくのかという事を地域で考えて頂きたいと思います。

最後のイベントは、川から町を眺めました。僕のいる研究室には、中国のウルムチ、新疆ウイグル自治区の学生がいます。今回のワークショップで、一人その地域の人がいて、一度隅田川の川くだりをした時に、えらく感動していました。

なんで感動しているのかなと思ったんですが、彼らの住んでいる町というのは、世界の中で一番海から遠いんです。だからあんな大量の水を見て感動していたんです。

翻って我々は、身近に水があって、感動を与える位の水があるにも拘わらず、それをあまり使っていないと思うんですね。

僕も子供の頃、川に行くと危ないといわれてあまり行かなかったんです。川に近づいて溺れた友達もいますので、川は危ないものとして自分の遊ぶ空間としては避けざるを得ない状況だったのです。

本来は、もっと川と遊んで、川を生活を豊かにするために使うという事が必要かなと思います。

そうすると、もっと生活も豊かになる、しかも安全であればなお楽しいと思うんです。その方向で考えていければいいかなと思います。

【葛飾・江戸川・足立区と一緒に考える場を作る】

全域が広域ゼロメートル市街地となっている葛飾・江戸川・足立区は運命共同体なんです。

こういった地域で問題意識を共有した上で、皆で一緒に考える場作りをしなければと思います。

今日はその第一歩で、新小岩北地区から始まってどんどん横に広がっていく。これまで焦点が当たっていなかった広域ゼロメートル市街地の問題を皆で考えていこうという動きに繋がれるのではないかな。

それが今、一番必要な事だと思っています。



今回のプロジェクトでよかった点は三つ

市古太郎（首都大学東京都市環境学部助教）

僕はいろんな地域で訓練や調査を体験していますが、地域とNPO、行政、専門家がそれぞれ力を発揮してやれた地区は他にないんじゃないかな、というのが僕の率直な感想です。

今回のプロジェクトで良かった点が三つあったと思います。一つは、とにかく楽しく出来たという事です。毎回ワークショップ（WS）は楽しい雰囲気になりました。実は事務局は準備不足で大変な事がいろいろありました。当日を迎えて、気が重いなどという回もあったんですが、会場に来て皆さんの顔を見ると、手筈を感じる事が出来ました。とにかく楽しく出来た、これは地域の力の一つだと思います。

もう一つは、WSで用いた手法にメリハリがあったと思います。街歩きから始まって、ボート体験を入れたり、荒川を水上から見たり、現場体験も含めて様々な内容になりました。

大学スタッフは、持てる力を充分発揮しました。

例えば、新小岩北地区で1.6万人位の住民がいて、その中の限られた人数でワークショップをやったわけですが、参加していない方をフォローするため、プログラム上は第4回目に、YES、NOゲームをやりました。

その中でこんな問題をやりました。「あなたは、寝たきりで介護が必要な80歳の旦那を抱えた78歳の奥さんです。町会から災害時要援護者に登録しますか、という用紙が回って来ました。あなたは登録しますか、しませんか。」という問いにYES、NOで答えるというゲームをやりました。



活発に論議されたシンポジウム

これは結構意見が割れました。登録するという意見もあったし、ここまで来て、人様の手を煩わすのは忍びないという方もいました。その他にも、子育て中の主婦役とか八百屋の主人役とかやりました。

こういった事を通じて、地域にいろんな人がいて、災害時にいろんな活動が出来そう。こんな人に力を借りればいい、といった話になるきっかけが出来るんじゃないかと思います。

三点目は、あくまでも訓練としてやったプログラムですけれども、その場だけの話で終るのではなく、日常的にやって見ようとする視点を参加した皆さんが持つことが出来たんじゃないかと思うんです。

先日、中国の主席が来られ、福田首相と会談されて戦略的互恵関係という言い方をされました。

「戦略的」を僕なりに解釈すると、災害時に、災害前にやっていない事は出来ないんです。

例えば、地域の人に声を掛け合って避難しよう。おじいちゃん、おばあちゃん、身体の不自由な高齢者に声を掛け合って避難しようというのも、普段挨拶する関係や声を掛け合う関係なくして出来るでしょうか。

「互恵関係」というのは、難しく考えるのではなく、日常的に出来る事が一杯あって、その一つが挨拶をするとか、声を掛け合う、そういった所から繋がっていく話が一杯あるんじゃないかと思います。

パネル展示 9月に開催

災害に備えよう、わか町新小岩

防災の日になんで、葛飾区新小岩地区の皆さんに防災意識の向上と災害に強い街づくりの必要性を再認識して頂くために、当NPOと葛飾区が協働事業として開催しました。

9月1日から9月5日まで新小岩北地区センターで行なわれましたが、多数の方にご覧頂きました。展示したパネルは、街の地勢や地盤沈下の状況、区内を流れる河川からの浸水予想区域等です。当NPOの活動をしている地元のメンバーが説明に当たりましたが、分かりやすいと大変好評でした。

活発な意見交換で区に提案を

青木克徳（葛飾区収入役）

昭和22年9月にカスリーン台風が来襲し、一番深かった新宿あたりが3.2mで、1階部分は完全に水没し、区全体で52,700戸が床上浸水しました。

その後、堤防と下水道が整備され、今は水害がないと皆さんは感じていると思います。

しかし、相変わらず200年に一度とか100年に一度という水害の危機は、常に存在する訳です。

荒川や中川の堤防が切れるという事が一番大きな水害の元です。荒川ハザードマップも荒川が切れた事を想定しているものですが、そういった事が無いように、堤防を強化する事業を区、都、国が協力しながら進めています。

この中川の七曲部分についても、上平井橋から高砂橋までを10年かけて整備することが決り、去年から事業が始まっています。

これによって、杭を今までの何倍も深く打ち、堤防が壊れないようにする工事が着実に進みます。

また、江戸川の方も堤防が決壊しないように、堤防をきちんと固めるような事業を進めております。

しかし、最近ミャンマーで200年に一度ともいわれる大水害がありましたけれども、そういった大水害が来るということは考えなければいけないのかなと思います。

このハザードマップを葛飾区は作りました。200年に一度位の水害で荒川が切れたら、こんな状態になりますよ、その時は、3階建て以上の建物に住んでいる方は、家の上の階に避難してください。

それ以外の方は、学校のような高い建物に避難をして下さい、と書いてある訳です。

これまで、避難場所を確保するため、高台を作ろう、とかいろんな意見を皆さんから頂いております。

やはり住民の方が、いざとなった時にどう対応していくかという事をご検討して頂き、区として何が出来るかという事をNPOの皆さんと相談していくことが大変大事な事と思っています。

今各町会の皆さんがお見えになっておりますが、是非皆さんで活発な意見交換をして、ご意見を私達区の職員にお聞かせ頂きたいと思います。

ポイントは隣近所の助け合い

鈴木忠男（葛飾区西新小岩四丁目町会副会長）

私も年寄り、カタカナ文字に弱いんです。勉強不足があるかも知れませんが、分かりやすく注釈でも付けてもらえれば有り難いと思っています。

水害になると、飲み水の確保が問題ですが、区役所は良いろ過機を持っています。葛飾区の総合防災訓練でも使っていて、私も泥水をろ過して飲みました。味はすごく良いです。

新小岩公園に3万トン、3万人分の水道水があるそうですが、水害時には確かに水没の可能性があると思います。ア！安全・快適街づくりが、新小岩公園のかさ上げを要請しているという話も、その辺から出ているのかなと思います。

これまで地震に対することに関しては、どうしょうか、ああしょうかと頭の片隅にはありましたが、水害に関してはまるっきりありませんでした。

私も住んで何十年になりますが、ゼロメートルという事は、川の水面より低いんだと聞いていました。

私の所は1m低い。最近の話によりますと、3m位低い所もあるように聞いていますので、水が出たらどうしようかとシンポジウムで初めて考えました。

加藤先生はじめNPOの石川理事長のお陰だなと感じております。

参加している人は、多少なりとも勉強していますけれども、これからは、どういう形にしても大勢の皆さんにご理解を頂くことが一番の問題かなと思います。

それと自分の問題として考えてもらうこと。自助・共助云々とありますが、自分の所は自分で最初に守らなくては行けないと私自身は思っています。

その後は、行政等からそれぞれ援助がありますから、命さえあれば、ある程度対応出来る。自分の近場の人達には、どんな災害があっても慌てるな、お互い身の安全を確保しろと。隣近所に年寄りとか子供が居れば、自分が逃げる前に必ず声を掛けよう。そういったお互いの助け合いが一番のポイントかなとそういう心構えでいます。



水害対策として井戸の活用を

中川栄久（葛飾区東新小岩七丁目町会長）



私は、水害が大好きなんです。なぜ大好きかというと学校が休めたんですよ。子供の頃、新小岩北地区には、大きな金魚屋が3軒ありまして、その金魚がみんな逃げるんです。それを追い駆けて回るのが楽しみで、毎日水害が来ないかなと思っていました。

ところが昭和22年、カスリーン台風を経験しまして、大変びっくりしました。私の家は比較的土地が高い方なのですが、水が押入れの中段から約30cm下まで来てしまいました。昭和22年9月18日だと思いますが、明け方には水が来るよといわれ、お昼頃には一杯になってしまいました。

困ったのは、飲み水が無いんです。トイレは、窓から全部捨ててしまえば水洗ですからこれはいいんです。井戸水が相当使えたものですから、井戸水をもっと考えたらいいんじゃないかと思います。

我が町内には、昔ふのり屋さんがあったんです。

そこには、何もしなくても飲める大変素晴らしい水を出す井戸があるんです。それが、当七丁目町会に松山さんというお宅があるんですが、そこにまだ生きているというんですよ。そういう井戸を活用して、ディーゼルモーターで汲み上げてもらえば、水害の時に助かると思います。

手押しポンプを知っていますか。昭和22年のカスリーン台風の時はその水を汲んで、下に穴が開いているカメの中に入れてろ過しました。

そのカメに砂とか砂利、シュロの葉っぱを敷き、炭を載せます。その上から汚い水を入れると、下から綺麗な水が出て来るんです。それをこし水というんですが、それがあれば、水を汲み上げて使えるんじゃないかなと思います。

昔みたいに、丸い釣り瓶で汲み上げる井戸も地面より1m位高かったから水が入らなかったの、それも使えました。井戸水が生きている所を探したら何軒かあるんじゃないかと思います。

次に我々の活動内容を参加していない皆さんに周知する方法についてお話します。

水位表示板は、当町会でも作られましたが、これを写真に写して回覧板として全世帯に回しています。

この写真は、平和橋通りに立っている水位表示板に、当町会の180cm位ある防災部長が手を伸ばしても届かない所に水が来ているよという事を示したものです。

また先日のボート体験で、ボートを組み立てている所を写真にし、回覧板で全世帯に見て貰いました。

地震の場合は歩いても逃げられますが、水が来たら歩いては逃げられません。しかし、あのボートで何人が運べるでしょうか。だから一番肝心なのは、区の方から第一次避難勧告があった場合は、とにかく逃げる事が先決ではないかと考えております。

そこで、町会でチェックシートを作りました。表に名前を書いて頂いて、裏に老人、介護必要、乳児とかを表示するというチェックシートなのですが、これを町会費を頂く時に、皆さんに配って書いて貰い役員が持っているという事です。

第一次避難勧告が来た場合は、老人とか介護が必要な人に声を掛けて、まずは逃がした方が良く考えて、町会として皆で力を合わせて、逐一こういう事をやっていきたいと考えている所です。

スーパー堤防とか、公園のかさ上げが出来れば、そこに避難すれば一番いい訳ですが、それまでどうしたら良さを私どもの町会で検討しています。

洪水が来る時は、皆さんと力を合わせながら、来る前に逃げようという事で、この秋に市川方面に車で逃げるような訓練をやりたいと思っています。

区にもお願いして、受け入れ態勢を用意し、市川まで行ったら雨風の中道路に立っているしかないという事の無いようにして頂ければ有り難いなと思っております。

小冊子「洪水に備えて」発行

本年7月当NPOと葛飾区の協働事業により小冊子「洪水に備えて」が発行されました。

この冊子は、ポケットに入る12ページ立のハンディタイプで、ハザードマップと一緒に保管すればいざという時に大変役立つものです。荒川東部低地帯に位置する葛飾区は、戦後の高度成長期に地下水汲み上げによる地盤沈下が進んだ地域です。区民が水害から身を守るための「防災リーダー研修会」が、葛飾区防災課の主催で、7月16日から区内各地区センターで開かれました。この研修会で「江戸川ハザードマップ」と共に、この冊子が配布されました。

まず現状を認識し危機感を

奈良本亨丞（葛飾区上小松町会長）

ワークショップには、3回程参加しました。その中で、特に感じた事は、大成化工さんの会社の入口の所に水位表示のポールがございますが、あれに興味を持ったことです。

そこで上小松、町会の町会会館の所に、ゼロメートルというのはこの辺ですと、表示しました。

アルミの5センチ角位のポールに、私の腰位の高さで東京湾の平均水位がゼロとして表示され、荒川の水位（AP）が腰の位置に、過去の最高水位は、ポールが短いので会館の2階の所に矢印で表示されています。

水害対策は、まずこの地域がどういう所にあるのかを認識し、危機感を感じてくれる事が大事です。その次の対策は、具体的には何もやっていませんが、情報伝達、これが一番大事な事かなと感じています。ついこの間も地震がありましたが、大きかったらどうしようかと一瞬頭を過ぎりました。

そういった危機感を感じ、ご指導を頂きながら対策を考えて生きたいと思います。



活動の拡がりの子供の参加から

内田真義（葛飾区小学校PTA連合会長）

水害にしても、地震にしても、最近の子供さんのご父兄の方は、防犯などの勉強会をやる時には出席するんですけども、めったにない、直接自分たちに係わりの無いことに関しては、なかなか参加して下さらないのが現状です。

最近、いろいろやっていて思ったのですが、子供たちに、昔はここまで水が来たのだという事を学校で、地域を回らせて勉強する機会を作ると良いのではないのでしょうか。

子供が家に帰って、お父さん、お母さんに、「今日、こんなの見てきた。お父さんの背よりも高い所まで来ていたよ」といえば、親は少しずつ関心を持ち始め、「今度歩いている時に見てみよう」という事になるのではと思います。

水位表示板を子供は得意になって、「ここにこの線があるでしょ。昔はこの線まで水が来たんだよ。」と説明すれば、親はそれを人に話して、少しずつ拡がると思うんです。

汚水をろ過する防水訓練を

葛飾区民（東新小岩八丁目）

水害があった場合の飲料水はどうゆう風に考えているのでしょうか。地震の場合、葛飾区長が、この前区議会を傍聴にいきましたら、新小岩公園に水道水の貯水タンクがあるから大丈夫だというけれども、水害になったら、いくら新小岩公園といっても水没してしまうんじゃないかと思います。

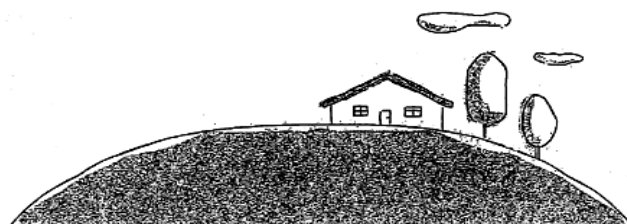
水害があった時に、中川の水を小さなろ過機で濾して飲料水として使ったんです。けど時々二上小学校の防災訓練があるのですが、水道水をろ過機に入れていたので、そんな事をやってダメだといったんです。汚い水を濾してこそ防災訓練なんです。

昔、水害があった時は、中川の水を、今みたいに汚くはなかったけれど、それでも濾して皆で飲んでいた。水害時の飲料水の確保に対して葛飾区はどのように考えているのでしょうか。



やはりこれからは水害にしても、地震水害にしても、この地域を守るのは、何時もこの地域にいる中学生、小学生の高学年、そしてPTAのお母さん方等、昼間も夜もこの地域にいる人達なので、この人達の力を借りない手は無いです。

中学生や小学生にこういった教育をしてもらい、まずは遊び半分で、探検ごっこをしながら分かってもらうことです。そうすれば段々子供達から拡がって、親に、若い人達に拡がって行くと思うのです。



2階のない人は土手で避難生活

鈴木一喜（葛飾区西新小岩三丁目町会長）



昭和22年のカスリーン台風の時、私は六つでした。私の住んでいる所は中川の土手を背にしており、低地でどんづまりですから、水が来るのが一番遅くて、引けるのも一番遅かったと思います。

農家だったので、鴨居の所に田舟がありまして、大人が田舟で中2階に入れるような水の量でした。

私の家は、一部二階でしたが、当時上平井には2階建ての家は少なくて、親戚が避難して来ました。確か2階は6畳間だったんですけれども、9月ですから蚊が一杯いて、蚊帳を吊って15人とか20人が生活をした記憶があります。

当時は剃刀堤防じゃなくて土の土手でして、2階の無い人は、テント村じゃないですけど、殆どが土手で生活していました。

それと水が引けるのが遅かったので、屋根に梯子を掛けて、2階の窓から出入りしていました。

私は大成化工さんと同じ町会という事で、前社長の徳倉さんの呼びかけでNPOが立ち上がる前から、そういうお話を聞いておりました。

しかし、はっきり言ってスーパー堤防というのは理解できておりませんでした。

その後いろいろ見学させて頂き、土手の幅が50m～100mということで、これならば大きな地震が来て地割れしても、堤防が決壊する事はないということで、感動したんです。

その後、水位表示板を西新小岩三丁目を中心にして8本設置する話がありました。もしこれをやったら、地元の不動産企業が反対するんじゃないかという相談を石川理事長から受けました。

当然、不動産業の方は、荒川が決壊する心配があるなら、お客さんはこちらに引越したくなくなるんじゃないかと思いました。

私は子供の頃から自分の住んでいる地盤が低いという認識はありましたけれども、水位表示板が出来て初めて、大潮の満潮の時は、2階でも住めない所に住んでいる事を認識できた次第です。

町会としまして、会員にこういう事を啓蒙しなければいけないけれども、昭和22年からもう60年以上ですから、経験している方が高齢になっています。

今の家庭の中心は、水害を実感出来ない世代なので、町会として苦労するところですが、決して町会として諦めている訳じゃなくて、総会や人の集まる場所でお話をしていきたいと思っています。



逃げる道が無くなる水害

鴨川美紀（葛飾区民）

私が高校卒業まで住んでいた那珂湊、今のひたちなか市には那珂川が流れていますが、私の住んでいる家に水が入って来たという事は全くありませんでした。

たまに氾濫して、両側にある田園地帯が水浸しになったのを見た程度でしたので、全く実感が湧かないというのが正直な所です。

最近、家族と話をしているんですが、地震があると怖いけれども逃げる道がある、歩けるんです。水害の場合は、逃げていく道が無くなるので、これからは地震より水害の方がよっぽど気をつけないといけないんじゃないかという話はしています。

ハザードマップでは、私の所はブルーだったので、安全なんだと思っておりました。しかし、シンポジ

ウムに参加するので見直してみると、ブルーでも腰位まで水が来ってしまうという事に気がついたのです。

ハザードマップを作って配布したというだけでは、周知が難しいので、やるべきことがあると思います。水位表示板の設置やボート体験も、もっといろんな所でやってみたり、大成化工さんが各町会に贈与された避難用のボートを町会の方が中心となって活用していく中で、その輪が広がっていくと思います。

何をしているんだろうと興味を持った人がどんどん参加して、最終的には、町中の人が1回は乗った事があるよ、この地域はボートが使えるんだという事になればいいんじゃないかと思っています。

よかった父の対応

岩城堅司（葛飾区新小岩第三自治会長）

カスリーン台風は、群馬県境に近い埼玉県の栗橋という所が切れたので、新小岩まで水が来るのに、確か3日か4日かかっています。

親父が建築を得意としていまして、3日、4日の間に10cm角位の材木を10本位並べて筏を作ったんです。浸水時には、それで動き回ろうという事で、対応が良かったんです。

私は平屋に住んでいたのですが、床から1m位の所に畳を敷き詰めて、家財道具を置きました。後で聞くと、なかなかそういう対応をした方が少ないという事でした。

2階家の貸家一つあったもんですから、2階で半月から1ヶ月いたんです。2階生活は家族共々、間借りさんの方々と一緒に過ごしました。

水位表示板は、非常に大事なものだと思います。

区役所に、水位表示板を何箇所か設置してくれないかと、3年位前に話しましたが、安価なものではなく、当時20万円位しており、方々に設置する訳にはいかないんだという事でした。

今は、200箇所を設置されていますが、聞いてみると電信柱に赤いマークをして、水位表示板は高価なものを使わないで出来るという事です。

水害の時に、水位がどの位になるのかという事を、住民の皆さん1人1人に認識してもらう事は、防災の第一歩を進める上で大きな要点だと強く思います。

まさかの時の対応をシミュレーション

葛飾区民（西新小岩五丁目町会）

私は4歳の時にカスリーン台風で、家の近くの郵便局に避難しました。その時に、近くに養豚場がありまして、子豚が親豚と泳いでいるのを見ましたが、それは私も親が助けてくれたからこそ今があることを思わせました。

5回ワークショップに参加させて頂きました。

まず、自分がそういう事にあった時に、自助努力としてどうしたら良いかという事を考えました。

その次に、共助として、家族とか、近くの1人暮らしのお年寄りの安全という問題について町会や地域の方とどういう風になるか。

それから、公助として、行政がどういう面で援助出来るかという事をシミュレーションでいろいろと検討し、10年先はどういう風になるかを考えました。

私の所の五丁目は、今、3,600人がおりますが、避難先は1,500人位しか収容出来ません。約2,000の方が避難出来ないという事です。

そこで自治会長さんと、近くの高層マンションの管理組織の会長さんに、そういう時には、3階を避難場所に是非お願いしたいと、協力を要請しています。

それから、スーパー堤防というのが、江戸川区の平井にあり、今、川端の所に大きな堤防が作られつつあります。公助として、これを作るんだという目的意識があれば、おそらくスーパー堤防を作るのも不可能ではないと考えています。

*** 全国都市再生街づくり会議2008 *** 広域ゼロメートル市街地研究会が奨励賞受賞

「全国都市再生まちづくり会議」は、全国の草の根まちづくりに関わる人達の支援交流を進めるため、2005年から3年間、東京で開催されました。第二ステージを迎えた今回から「全国まちづくり会議」として北海道恵庭市で新たなスタートをし、東京と地方で交互に開催されることになりました。ワークショップを当NPOと協働して取組んでいる広域ゼロメートル市街地研究会は、ワークショップの取り組みについて発表し、「地域力とエンパワメントに優れた華のある取り組み」と評価され、奨励賞を受賞しました。

今後、広域ゼロメートル市街地研究会が、名古屋、大阪等、広域ゼロメートル市街地で街づくりや防災対策に取り組んでいる諸団体と交流を深め、問題意識の共有を図るために大きな役割を果たすことが期待されます。

NPO設立の原点

徳倉眞治

(NPOア！安全・快適街づくり副理事長)

大成化工の徳倉です。今日ここに私がいますのも、石川理事長がいますのも、子供の時の原体験から来ている事をご理解頂けたらと思います。

私達は一緒に暮らして、三河湾の内海の海の近くに育ちました。そして8歳の時に、家の倒壊による死者、地割れ、火事の出る大地震を2回体験しました。

その上、昭和28年、17歳の時、台風13号による大水害の体験もしました。その時の怖さは、水がひたひたと押し寄せる等と言うような生易しいものではなく、地上に作られたプールの壁を切ったら、どばっと上からかぶさって来る時のようなものです。

その怖さは言葉で表現しにくいのですが、中川下流の堤防が地震で決壊した時を想定すると感じられると思います。

その後、これらの体験を持つ二人が、計らずも共に東京に住み、私はたまたま新小岩に縁があって事業を営みました。

この地域の状況については、何とかしなくちゃ危ないと感じておりました。しかも中川と新中川の間に42万人の人が住んでいるのですが、万が一中川が切れたらどんな状態になるだろうか、間違いなく、数万人が命を失う。これが私がNPOをやっていると思った原点です。

石川理事長も、都の技師として、そして隅田川のスーパー堤防の生みの親としてやってきた事から、ここの所は何とかしなければいけないと思いながらも手が出せなかった。だからこれからの余生はここにすぎ込もうと、二人の思いが合致して、NPOを立ち上げたということです。

やはり子供の時分の想いというのは大事ですから、子供の時から教育が大変重要だと思います。

もう一つは、ひたひたと押し寄せてくる水害ではなく、どばっと来る水害の体験を画面でも何でもいいから知っていただいて、それに対してどう対処していくかを検討して行く事も加えて頂ければと思っています。

石川理事長に聞く

(編集) これまでの2年間、広域ゼロメートル市街地研究会と協力して新小岩北地区でワークショップ活動に取り組んで来ました。その纏めとして5月10日にシンポジウムが開催されましたが、どのように評価されていますか。

(石川) 当日は雨にも拘わらず、100名以上の方が参加され、活発な議論が行なわれました。2年間で合計5回のワークショップとボートの乗下船体験、船や川から街を見る等のイベントを積み重ねる中で、地元の中で共に大水害に備えた街づくりをして行こうという気運が高まって来たと思いました。

当NPOの今後の活動の出発点となるもので極めて意義が大きいですね。

(編集) 今後他の地区への広がりが期待されますか。

(石川) 地元では、新小岩北地区に次いで、奥戸地区、新小岩南地区、松島地区等でも水害に対する防災意識が醸成されつつあります。引き続き住民の皆さんに理解を深める努力が必要です。

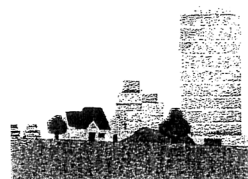
(編集) 当NPOのPR活動の今後の課題としては何が重要ですか。

(石川) 地元の住民を対象にして、PRに努めることは当然です。しかし、防災対策にしても、街づくりにしても関係住民の皆さんの理解を深めるだけでは、具体化するのには困難です。どうしても、国、都、区の理解を得て、防災対策や街づくりを具体化する必要があります。そのためには、地元だけではなく、広く理解を得るPRが重要となります。

(編集) 当NPOだけでは力不足ですね。

(石川) そうですね。力不足を補うためには、国、都、区はもとより、防災や街づくりの団体との連携を強め、イベントを開催したり、イベント等の機会を全面的に活用して、パネル展示や街づくりニュースの配布等を行なうことが必要です。

(編集) なるほど。ありがとうございました。



海拔ゼロメートル 世界都市サミット開催

主催 世界海拔ゼロメートル都市サミット実行委員会（国交省、東京都、江戸川区）
後援 国連大学、国連広報センター、千葉県、愛知県、岐阜県、大阪府、兵庫県、日本水フォーラム、土木学会、河川環境管理財団、リバーフロント整備センター等
期間 2008年12月15日～17日
会場 タワーホール船堀（都営新宿線船堀駅前）

地球温暖化による気候変動や海面上昇が現実となる中、その危機に直面している世界各国のゼロメートル都市が一堂に会し、適応策を論議し、さらに全世界に向けて、この危機的状況について、緊急事態を共同で宣言するため、「世界海拔ゼロメートル都市サミット」が開催されます。

当NPOは、このサミット期間中に開催される「地球環境展」にパネルを展示する予定です。

なお、サミットに参加を予定されている都市名とプログラムは次のとおりです。

◆参加都市

- 国外 ベネチア、バンコク、南ホラント（オランダ）、北ホラント（オランダ）、ニューオリンズ、ロンドン
- 国内 浦安市、弥富市、尼崎市、江戸川区

◆プログラム

○12月15日（月）10：00～17：30

午前 緊急報告

- ・沖 大幹 東京大学教授
- ・W. マキューソン教授（前米土木学会会長）

午後 参加都市報告

- ・江戸川区・浦安市・南ホラント・北ホラント

○12月16日（火）9：30～12：30

午前 参加都市報告

- ・バンコク・ベネチア・ニューオリンズ

○12月17日（水）14：00～17：00

サミット会議・緊急事態宣言

安全 快適街づくり勉強会 水害の制圧から 融合の街づくりへ

・・・12月6日 新小岩地区センターで・・・

本年5月に開催されたシンポジウムでは、見えてきた地域・行政・専門家のネットワークが大きな力を発揮しました。

このネットワークをさらに深めるため、新潟大学名誉教授大熊孝先生をお招きして、これまでの取組みに参加してきたメンバーを中心にした勉強会を開催します。

大熊先生は、土木史と河川工学を専門とされていますが、近代的技術によって川と人との関係が分断されていった過程と、その関係をもう一度豊かにする方法について研究されています。

★

★

主 催：NPOア！安全・快適街づくり
広域ゼロメートル市街地研究会

日 時：2008年12月6日（土）

11時30分から現地視察

14時30分から講演と参加者との討論

場 所：新小岩北地区センター

参加者：これまでのワークショップの関係者
及び2008年の都市再生モデル事業に参加した専門家・行政関係者等

街づくり活動に参加しませんか

「ア！安全・快適まちづくり」は会員を募集しています。

個人でも団体でも参加できます。問合せ先
事務局TEL・FAX 03-3696-7480

発行

特定非営利活動法人

「ア！安全・快適街づくり」

〒124-8565

東京都葛飾区西新小岩3丁目5番1号

Tel・Fax 03-3696-7480

E-Mail tegami@banktown.or.jp

ホームページ <http://www.banktoen.or.jp>

